

緑爽会会報 No. 175

2021年8月24日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



デザイン・制作 関塚貞亨

オリンピックが終わって

代表 富澤 克禮

最初は、数ヶ月で終息するのでは？と思われた新型コロナは、1年半を経過し、東京オリンピックが終わった今、感染者の数は、連日最多となり、医療は崩壊状態に陥っています。

緑爽会の活動については、7月の「暑気払い」の中止に続き、9月に計画しました山川会員の「さがみこベリーガーデン見学会とBBQ」についても、《予告など》でご案内のように、10月開催に変更しました。10月以降の行事が予定どおり実施できることを祈っております。

このような厳しい状況の中、会報175号を予定どおりお届けできますことを嬉しく思います。これも原稿をお寄せくださる会員の皆様を始めとして、厳しい制約がある中、印刷・発送にご協力頂きました皆様のお陰と厚く御礼申し上げます。

まだまだ厳しい状況が続くことが想定されますが、会員の皆様におかれましては、健康第一でお過ごしください。元気にお会いできる日を楽しみにしております。

～～《寄稿/投稿》～～

良き友人と良き隣人

芳賀 孝郎

私には良き隣人が居る。その隣人は模型の蒸気機関車に乗って、庭に敷いてあるレールの上を走っている人である。その出会いが面白い。

2008年6月、私はカトリック世田谷教会の関根神父が率いる12日間のイタリア巡礼の旅に参加した。巡礼の案内役は私の山仲間の谷 泰氏（京都大学名誉教授・文化人類学者・1962年サルトロカンリ登山隊員）である。今は、大学を退官し、現在夫人の郷里イタリア・ベルガモに住んでいる。

谷氏が巡礼の案内役になったことには次のような経緯がある。たまたま妻が持っていた谷氏の著書「カトリックの文化誌—神・人間・自然をめぐる—」に関根神父が目留めた。谷氏と私が友人であることを知って、巡礼の案内役をお願いしてくれと頼まれた。私は早速谷氏へメールした。谷氏が引き受ける条件は「芳賀が参加するなら」であった。

カトリック信者でもない私は妻と共に巡礼に参加することになった。そこで、ローマ郊外にある世界最古の聖ベネディクト修道院を訪ね、3泊した。その図書館にはグーテンブルグ印刷機があった。ドイツ人技師2名が機械と同行してイタリアで最初の印刷を行ったこと、そこにはネロの墓など興味ある歴史的な場所があった。

谷氏が留学中に調査をした村をも訪れ、お世話になった老婆に会った。

ミラノ大聖堂訪問、北イタリア・マッジョーレ湖畔に建つ幼きイエスの家修道院にも宿泊した。最後は巡礼と別行動で谷氏と私たちは車窓からアルプスを見ながらトリノへ行き、イタリア山岳博物館を訪ねた。

谷氏のイタリア語、ラテン語と豊かな知識のお蔭で、素晴らしい巡礼の旅であった。どこの修道院でも大寺院でも特別な待遇であった。通常見ることのできない処も案内してくれた。神父も参加者も大喜び、みんなが谷氏の人柄に魅せられ谷ファンとなった。



谷 泰氏とアンナ夫人

4年後谷氏はアンナ夫人と共に札幌の我が家にやってきて、4日滞在した。今度は私が案内役を務めた。大倉山ジャンプ台、植物園、北大構内、北海道博物館等を案内した。

ある日、私たちは谷夫妻と共に宮の森の住宅地を散策した。近所の風景と北国の住宅建築を見ながら歩いていた時である。目の前の家の庭から煙が上がり、その煙が動き出した。煙を見上げているとその住人と思われる人が出てきた。「その煙は何ですか」と尋ねると「どうぞお入り下さい」と言われ、庭に入ると、そこには人が乗れる蒸気機関車があり、庭にはレールが敷いてあった。

住人の肥田野豊氏は機関車に乗って、走らせて見せてくれた。煙が動いた理由がわかった。驚いて見ていると「家にお入り下さい」と言われたので、遠慮なく家に入り、お茶をご馳走になった。私は「近所の宮の森に住む芳賀です」と自己紹介した。更に谷氏とイタリア人のアンナ夫人を紹介した。すると肥田野夫妻は驚き、喜んだ。

恵里夫人は、一週間後にイタリア旅行に出かける予定だったからである。肥田野氏のご子息は当時、フィレンツェで靴のデザインの修業中であった。アンナ夫人は「イタリア旅行の折は是非ベルガモの家にどうぞお寄り下さい」という話になった。

その一週間後に恵里夫人は友人二人を連れて谷氏宅を訪問し、宿泊してきた報告を後日受けた。それから私たちの肥田野ご夫妻との交流が始まった。

肥田野氏は6年前に弘前大学を退職して、札幌・宮の森へ移住してきた。農学博士・弘前大学名誉教授である。

恵里夫人はマリンバ奏者で演奏活動をしている音楽家である。時々恵里夫人の演奏会に招待され音楽を楽しんでいる。その後も、夫人は友人と共にイタリア旅行をした。再度谷氏宅を訪れ、谷氏の山小屋へも宿泊している。最近、谷氏の近況については肥田野ご夫妻に問合せしている。

肥田野氏は母校の北大交響楽団OB仲間と毎年演奏している。私たちはその度に招待され、演奏を聴く機会に恵まれ喜んでいる。先日のドボルザークの「新世界」の演奏の時、恵里夫人はティンパニを力強く演奏され、その隣には肥田野氏がホルンを吹奏された。夫婦並んでの演奏は素晴らしかった。



恵里夫人と肥田野 豊氏

恵里夫人は多忙の中、弘前リンゴのジャム、ソース、庭のラズベリー、ブラックベリーのジャムを作っている。その美味しいジャムをいただき、毎朝の食事で楽しんでいる。ジャムが無くなる頃になるとジャムが届くのである。誠に幸せなことである。その他に私の好きなお赤飯、チラシ寿司、

飯寿司など全てお手製の心のこもったものを時々いただく。私の人生で、隣人からこの様にお世話になったことははじめてである。その幸運に感謝している。

「Life is giving」の精神で、日本で生き抜いたあるドイツ人女性・ローゼ夫人を思い出す。

私が薪割に苦戦しているのを見た肥田野氏は、電動薪割機を貸してくれた。重い薪割機を車に乗せるために、ゆるい傾斜の台を作り、ロープで引き上げる道具まで作り、機械を家まで届けてくれた。それだけではなく庭のバラの台作りと関根神父から注文の白樺材の燭台等の製作もお世話になった。その行為に感謝し頭が下がる思いである。

老人は謙虚に人からのお世話を受け止めようと思う。私は良き友人のお蔭で良き隣人と出会った。感謝、感謝である。

2019年1月記

「良き隣人」からひとこと

肥田野 豊

皆様、はじめまして。「良き隣人」こと、肥田野 豊でございます。

私と妻恵里は、8年ほど前から大倉山シャンツェの麓、宮の森に住んでおります。そして、芳賀孝郎様が「良き隣人」にお書きくださった通りの、実に偶然のきっかけでご夫妻、そして谷 泰先生ご夫妻と出会い、素晴らしいお付き合いが始まりました。以来、ご夫妻のご著書を頂戴したり、お話を伺ったり、絵を拝見したりと、周りの方々も巻き込んで、私どもにとっては世界が広がる一方です。

ご夫妻は私どもよりちょうど一回り上のお年ですが、お元気で前向きなお姿は私どもの良い目標でもあります。

そんなわけで、私どもにとってはご夫妻が「良き隣人」であり、お付き合いは本当に楽しく、また多少でもお役に立てているなら、大変嬉しいことであることをお伝えいたしたく、筆を取りました。どうぞよろしく。

2021年7月記

やっと届いた陛下との記念写真

松本 恒廣

今、私の机の上に、一枚の写真が置かれている。天皇陛下と古野会長、フォトクラブ代表で緑爽会会員でもある川嶋さんと私、4人の記念写真である。

令和元年の年次晩餐会での恒例の展示は、自然保護委員会とフォトクラブが受け持った（緑爽会会報166号参照）。当日はこの展示を陛下がご覧になるに当たり、前者を私が、後者を川嶋さんが、ご説明することになっていた。今回の展示については、私が日本山岳会百年史に執筆した「自然保護のあゆみ」をもとに作成された年表が使われていたので、私がご説明することになったようだ。当日この4人を総務委員が撮ってくれたのだが、そうなる出来上がった写真を欲しくなるのが人情というもの。ところが年が明けても一向に音沙汰なく、その年も暮れた。こちら半ばあきらめていた頃、足掛け3年目の今春4月半ば、総務担当常務理事名で「宮内庁に代わり」として封書が届いた。そこには写真と共に「このお写真についてはマスコミに公開することや、SNSやWEBサイトでの投稿を控え、ご自身のみでお楽しみください。」とありました。私にとってもJACに入会して間もなく50年。一つの思い出になる出来事ではありました。

編集者余話〈その3〉

南川 金一

1996 年からは百年史編纂委員会にも入るように声がかかった。百年史委員会はすでにスタートしていたが、10 年ほど先にゴールが見えてきた段階で、体制の立て直しを図ったのだった。百年史では、何はともあれ、『山岳』と会報を読んで、会の記録上にある事柄を頭に入れることだった。それは最低限のことで、明治末に山岳会が発足するにあたっての時代背景、すなわち幕末から明治維新、さらには明治という時代を理解する必要があった。本紙 No.154 の「武田久吉と日光」に書いたように、武田久吉を知るためには、父親のアーネスト・サトウが活躍した幕末の時代までも知らなければならないのである。いわゆる教養に属することであるが、こればかりは付け焼き刃の知識ではどうにもならないことであった。山登りという趣味は時間を必要とするから、多くの山に登り、他方で多方面の本を読むことを両立させるのは難しい。

山岳会の歴史を調べるにあたって、創立以来『山岳』が発行されてきたのは何よりである。しかし、戦前の虎ノ門の会室に保管されていたであろう、創立以来の資料が空襲で焼けてしまったのは痛い。また、山岳会草創期に中心的に働いた会員が居住していた横浜や東京が、関東大震災と戦災という2度にわたる壊滅的打撃を受けたことも痛いことだった。個人的に保管していた資料も残っていないのである。山岳会史のよりどころは『山岳』であり、昭和6年以降は会報が加わる。しかし、『山岳』や会報の記述には濃淡があり、編集者が変わると掲載方針が変わる場合があって、その結果として記述に一貫性がなくなる。そこに記されていないことは、『山岳』や会報の記事の行間を読み、紙背を読む必要があった。個人の判断や理解では思い込みが生じるから、時には委員会で議論をした。「山岳会法人化の意味」「戦時体制下での日本山岳会は」といったテーマである。

創期会員約 400 人を調べる

私が最初に取り組んだテーマは、山岳会設立当初に入会した人たちを調べてみることであった。設立後の1年間で約400人の入会者があり、それらの人の入会の動機は何だったのかを調べてみたいと考えた。前に書いたように、退職してやや自由な時間ができたところへ、習いたてながらパソコンを使って、初歩的なデータの整理に役立てられるようになったので、『山岳』の執筆者索引のようなものや、会員に関するリストを作ってみた。最初の会員名簿である明治40年の名簿で、人名辞典を調べてみると、驚くほどに当たりがあった。社会的に無名であって人名辞典に載ることはない。設立したばかりの山岳会に、有名人がかなり高い割合で入会しているのが不思議だった。調べているうちに分かってきたのは、会が発足するにあたって、とにかく一定数の会員をと、7人の発起人がそれぞれに友人知己に声を掛けたのである。城数馬は弁護士という仕事や趣味の山草収集の知り合いを、小島烏水は『文庫』編集者として作家・文学者などを、高頭仁兵衛は新潟の大地主の旦那という人脈で、それぞれに呼びかける側がそれなりの人物だったから、相手の方もそれなりだったのである。若いとはいえ高野鷹蔵は博物学同志会横浜支部で半端な存在ではなく、他の若い3人も東京府立一中や博物学同志会の仲間の多くが一高へ進み、将来の学者予備軍だった。会の設立時は無名であっても、後に有名な学者になって人名辞典に名前が載るようになったのである。

現地へ行って調べる必要もある。高頭仁兵衛について調べるべく長岡へ行った。『日本山嶽志』を書くために集めた資料は長岡市立図書館に収められていたからである。自費であるから新幹線に乗るなどとんでもない。青春18切符である。『新潟県史』に、新潟県における戦前の大土地所有に

関する統計資料が見付かったのは大収穫だった。また、高頭仁兵衛の人脈の広さを再確認することができた。高頭仁兵衛家は明治 34 年で 141 町歩、県内で中規模の大地主だった。高頭仁兵衛といえば、越後の豪農といわれていたが、どれほどの地主なのかについて、誰も調べていなかった。山岳会設立に際して、「資金的に援助する」と言われても、東京や横浜にいる発起人メンバーにはにわかには信じられるはずがなく、城数馬が“身元調査”に行ったのは当然だった。

せっかくの新潟であるから、山に登って帰りたいと考えたが、4 月に入ったばかりで山は冬山である。駅から歩いて行ける山として、米山に登ることにした。ピッケルとワカンを持参、情報は 5 万図「柿崎」1 枚。米山駅のホームの脇は日本海であり、頂上は 992 ㍎で、標高差はほぼ 1000 ㍎。山麓の大平集落から奥にはもちろんトレースはなく単独ラッセルだった。駅で降りて、山を往復して再び電車に乗るまで、誰一人会えることはなかった。

松本の河野齡蔵宅を訪ねられなかったのは残念だった。河野齡蔵は高山植物研究者で信濃博物学会を結成、早くに山岳会にも入会していた。誰かが、河野齡蔵宅には、書斎が昔のままに残っており、山岳会関係の資料もそのままに残っている、という情報をもたらしてくれた。その資料を見せてもらうために訪ねようとしていた矢先に、松本サリン事件が起きた。家を継いでいた娘さんがサリンで重体だったばかりでなく、事件の第一通報者だった夫の河野義行さんが警察に疑いをかけられるという災難の渦中とあっては、訪ねるどころではなかった。

土・日・祭日も山岳会に“出勤”

百年史委員会では、委員各自が自分の希望するテーマに取り組み、纏まった原稿の素案を隔月に開かれる委員会に提出して議論に供し、委員会での議論を踏まえて書き直して原稿に仕上げるという形を採った。それらの原稿の編集は私に委ねられた。原稿は、手書き、ワープロ専用機、パソコンとさまざまで、作業効率が上がるように、手書きやワープロのものはパソコンで再入力することとし、渡部温子さんにも随分と骨を折ってもらった。2 階の編纂室に、私と渡部さんはほぼ毎日“出勤”した。基本的な資料は編纂室に置いてあったので、理事会の許可を得て鍵を預かり、会室が閉まる土・日・祭日も通った。交通費は出ないので、自転車に通ったが、タイヤが磨り減ってしまつて中のチューブが見えるまでになったので、タイヤ代だけを貰うことにした。

私としては、長丁場の仕事を一日も早く終えて山へ行きたかった。しかし、思うようには進まない。予定した原稿を全部揃えて印刷屋に渡すのが本作りの常識だが、原稿が揃うのを待ってられないので、見切り発車の形で、できた原稿から印刷屋に入れることにした。すなわち、早いものは再校、三校と進んでいるのに、一方ではまだ原稿が書き上がっていないのである。印刷屋の営業担当者から「夏のボーナス資金として見込んでいたのだが…」とこぼされ、その年の 11 月ころになっても年内にできあがるメドはなく、「冬のボーナス資金に見込んでいるのだが…」と再びこぼされる始末だった。中心的なメンバーの本人が病気、あるいは病気の家族を抱えているとあっては、無理強いもできず、そのテーマを私が引き継いで書くというわけにもいかない。そのうちに委員会の雰囲気までもがトゲトゲしいものになってきた。そんな状態では完璧を期しても無理な話であり、不十分であっても、とにかく本の形に仕上げることだと割り切った。

印刷屋には、将来に長く読まれる書物なので、校正は 3 回と制約しないで欲しいと要請し、少なくとも 4～5 校、多いものは 7 校までやった。校閲・推敲のために原稿段階で 3～4 回は目を通しており、ゲラ刷りについてもその都度すべてに目を通したので、数回から 10 回くらいも読んだ。

メンヒに登った日…1972. 8. 21

渡部 温子

1972 年の 8 月 5 日から 26 日まで、シャモニー、ツェルマット、グリンデルワルトを巡るツアーに参加しました。佐藤久一朗さんが主宰、小西政継さん、近藤等さんらがコーディネートした、第一回のキャラバンツアーで、登山とハイキングを主軸にした余裕のあるツアーで、私が日本山岳会に入る前のことです。そのツアーのグリンデルワルトでのことです。



左端にヴェッターホルン(3701m)、右へアイガー(3970m、左側の暗い壁が北壁)、メンヒ(4099m)、右端にユングフラウ(4158m) *標高は当時



左から 小西政継さん、添乗員、私
ユングフラウフィレンにて
(後ろはユングフラウ)

グリンデルワルト滞在 3 日目の 21 日は、みんなでユングフラウヨッホの雪の上で終日遊ぶことになっていました。朝食を終えて食堂を出るときに、ピッケルとアイゼンを持っていくように言われましたが、雪上遊びだからと深くは考えませんでした。昼食のとき、同席していた添乗員から「これからメンヒに登ろう」と誘われ、小西政継さんも途中までなら行くと言うし、行ってみようかという気になりました。メンバーは男性 3 人、女性 2 人の 5 人。

ユングフラウフィレンの上部を西壁にそって横断してメンヒを目指す途中、添乗員は呼び出しコールで離脱(別班の男性が転落事故)。12 時半すぎから始まった行動は、一昨日降った雪が強い陽ざしで溶けて、滑りやすくとても歩きにくい。

1 時間ぐらい歩いたとき、小西さんが「あなた達だったら大丈夫、行けるよ」と言ってあっさりと戻って行ってしまいました。なおも歩きつづけて 3887m のピークに着いたとき、もう一人の女性が、小西さんが居なくなったこと、勾配が増してきて下りに不安が有ることなどを理由に、ここから戻りたいと言い出しました。渡辺正臣さんに「安全な所まで女性を送ってくるから、ここで待つように」と言われました。先に降りた小西さんがたまたま振り返り、降りてくるその女性を見つけ、渡辺さんに大きく手を回して引き受けたという合図を送ってくれたそうです。渡辺さんが戻り、こんないきさつを聞いていたときには、もう 20 分以上経っていたと思います。

登山者は私たち二人だけになってしまいました。ここからちょっと緊張を強いられる急な狭い尾根の連続でしたが、あまり時間も掛からずに肩に着きました。「あと 300m くらいだよ」と言われた先は、両足を並べる位の細い稜線もありで、慎重に進みましたが、変化があり面白かった。

頂上 4099mには3時15分に着きました。何もない白い狭い頂上でしたが、360度本当に眺望はよく、山の名をいろいろ教えてもらいました。眼下にはクライネ・シャイデックのホテル群や、牧場の牛や羊たちも良く見えます。遠くにロープウェイのようなものが見えるので「あれはどこ?」聞くと「ヴェンゲンの町」と。後年訪れ、思い出の多い町になるとも思わず、記憶に残りました。

頂上には10分間くらい居たでしょうか。ザックを背負ったとき急に冷たい風が吹いてきて、思わず帽子やヤッケのひもを締めなおし、肩まで慎重に降りました。すると、前を歩く渡辺さんの後ろ姿が舞台のセリが下がっていくように消えたのです。とっさに表層雪崩だと分かったのですが、どこで止まるか、埋まってしまうのか、見届けなければいけない。下を覗いてみると、立ったまま消えた渡辺さんが仰向けに倒れ、流されながら反転しピッケルを手元に引き寄せている、幸いにも緩い斜面だったので大丈夫だと思ったのです。

これからどうするか迷っているところに、ピーピーピーピーと笛のような音が聞こえる。何の音か分からないけれど鳴りっぱなし、前後左右から聞こえてくるような気がするし、なんの音、何処からと思っていたその音は、下の雪原からだと分かりました。笛を吹いている人は双眼鏡を手合図を送ってくれていました。そのうち何となく笛と動作で意味が分かるようになりました。

一歩下がれということかと思えば下がると、今度は渡辺さんを指して腕を横に振っている。「直登でなく横に行けだつて」と伝えと、渡辺さんも気づき、それからは後ろを振り返りながら笛に従うようになりました。二人で合図を見ていれば分かりやすく、岩伝いに登るようにとの指示も音の調子でわかったし、少し違ふとピーピーと短く鳴りだす。ずっと見守り指示を出してくれて、いつの間にか不安は消えていました。渡辺さんはケガもなくルートに戻り合流できたので、監視員の方を探しましたが、もう姿は見えませんでした。

安堵感もつかの間、雲が足元までに湧き上がってきて、チロチロと炎のような動きをしています。まるで生き物のような雲に恐怖感がありました。風が無いから稜線を越えてこないだろうと、気持ちを切り替え、足元だけに集中して駆けるように下りました。まるで雲に追われているような気持ちでした。

稜線を下り終えて広い雪原に出たとき、急に濃霧の中に入っていく感じでした。すぐに激しい降雪に変わり「踏み跡を見失うな」「来てるかー」の声だけを頼りに、前かがみになって踏み跡をたどりました。ずぼっと片足をとられたり、滑ったり転んだりで追いつくことに必死でした。降雪の中を駆け足で進むのが苦しく、もう駄目だと思ったとき、ユングフラウヨッホ駅が突然目の前に現れました。雪から離れられるとホッとしました。

駅員の表情や身振りで、アイゼンをつけたままホームに行けということで、またまた駆け足でした。乗客はすでに乗り込んで、ホームには誰も居ませんでした。

そのとき、話をしながら笑顔で私に近づいてくる人がいて、直感で監視員の方だと思いました。握手とハグをしてホームに送りだしてくれました。最後まで見届けてくれた方に、私は振り返りもせず、2輦目の乗車口を目指し飛び乗ってしまったのです。ありがとうございましたと言えない、口が貝になったかのように翌日まで一言も話せませんでした。

電車での美味しかったミルクティーも、監視員の方の手配だったと後で知りました。助けられてお世話になった恩人である方に、お礼や感謝の気持ちをひとつとも言わずに、別れてしまったことを、50年近く経った今でも後悔し続けています。このツアーの一番の思い出です。

*注：佐藤久一郎：キャラバンシューズを考案、小西政継：グランドジョラス北壁冬季登攀、近藤等：フランスの山岳図書を多数翻訳、渡辺正臣：「緑爽会」の名付け親

「駒の鐘」と川崎隆章の詩

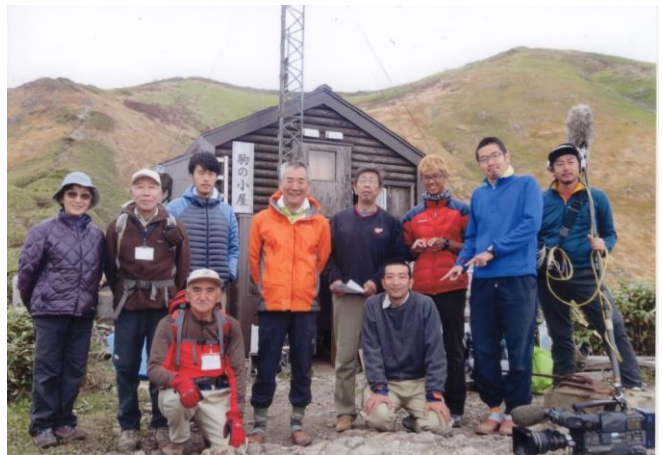
吉田 理一

山屋にとって山小屋の管理人を経験することは一つのロマンでもある。越後駒ヶ岳(2003m)の9合目にある駒の小屋(1890m)の管理人は、第10代志田幸夫氏を最後に、平成20年からは魚沼市のNPO法人「魚沼自然大学」が魚沼市から管理を受託し、有志数名のローテーションで運営にあっている。

私は平成25年からこの管理人のローテーションに加えていただき貴重な体験をすることが出来た。平成26年5月には緑爽会例会で「駒の小屋管理人体験談」と題して講演させていただく機会を与えていただいた(会報128号参照)。この体験談は越後支部機関誌「越後山岳第13号」(平成29年越後支部発行)に「駒の鐘」と題し載せていただいた。平成26年8月の管理人当番の時はJACC自然保護委員長でもある緑爽会の川口章子さんパーティーが、平成27年10月には緑爽会の荒井正人さんが登ってこられ、管理人室で親しく歓談することが出来た。

駒の鐘は東京千住で登山用具店「駒草山荘」を営んでいた長谷川勇(後に吉田姓)が昭和30年5月に寄贈したものである。昭和54年5月発行の「山と溪谷・臨時増刊」で長谷川は次のように述懐している。「当店の利益の幾分かは山に還元していく・・・谷川の鐘・蓬の鐘・平標の鐘・」。

平成25年10月12日から4日間、NHK総合テレビ「小さな旅」の国井雅比古アナウンサーはじめ取材チーム6名が宿泊された。国井氏に駒の鐘寄贈の由来と鐘に刻まれた川崎隆章の詩を紹介したところ大変関心を示され、スタッフ2名で鐘を地上に降ろし撮影された。小さな旅「山の歌 秋 ころも澄む稜線～新潟県 越後駒ヶ岳～」は平成25年11月10日(日)午前8時全国放映された。その日のうちに私のブログに驚くべき方からメッセージが届いた。「吉田(長谷川)勇は私の父です。千住の店はもうありませんが父の生前に・・・駒の鐘はかなり良い状態のようで安心しています・・・」。テレビの力の大きさには改めて驚かされた。



越後山岳に寄稿した調査研究「駒の鐘」は次の一文で閉じてある。『駒の鐘と平標の鐘の詩については川崎隆章の詩であることを確認しました。他の鐘の詩も川崎隆章の作品であるかどうか今後の調査研究の課題としたいと思います。』

「駒の鐘」が載っている越後山岳第13号が刊行された後、越後支部の桜井昭吉会員(会員番号5021番)が長岡ハイキングクラブ創立60周年記念誌「山なかま」(平成24年2月10日 長岡ハイキングクラブ発行)を拙宅まで届けて下さった。

何の事はない、私が今後の調査研究の対象としていた他の鐘の詩は、既にこの記念誌の中で「山の鐘」と題して室賀輝男氏(名誉会員3925番・第5代越後支部長)がすべての鐘の詩を紹介していたのである。同誌から各鐘に刻まれている詩を転載させていただく。

「駒の鐘」 かつて我が歩みし友は今亡くて
哀しきかもよ鐘の鳴る音

「土合の鐘」 トンネルの入りゆく汽車の笛かなし
心にしみて亡き友思う
「肩の鐘」 鐘は鳴れみ山慕いて逝きし子の
魂にもひびけ鳴り渡りゆけ
「蓬の鐘」 辿りきし峠は目路のひらけきて
日は寂しかなり亡き友思う
「平標の鐘」 日本海の気流はこりて湧く霧の
しまきは深し亡き友思う
「土樽の鐘」 降り立てる山の小駅に亡き友の
面影おもういざ谷川へ



「苗場の鐘」は旧和田小屋移転の際、和田喜太郎の生家近くの小千谷市三仏生(さんぶしょう)の庵寺に移管。この鐘にも川崎隆章の詩が詠まれているものと推測されるがまだ確認していない。

※ この時点では、川崎隆章が長谷川勇寄贈の鐘に詩を寄せるに至った経緯は不明だった。

平成 30 年 6 月越後支部遠藤支部長を經由して私宛に「山の鐘」に関しての資料提供があった。提供者は日本山岳文化学会文献分科会・日本山書の会の和井田一雄氏で、同氏が所蔵している千葉県野田市の「憧稜山岳会」の会報「磁石」第 7 号(創立 10 周年記念号)昭和 44 年 10 月 1 日刊のコピーを提供して下さった。この会報の中で川崎隆章は次のように述べている。

『私の旧来の親友長谷川勇君(現吉田)』と表わし、『勇君の山の店・駒草山荘というのは私が名づけ親で、それが発展して勇君は駒草山岳会を創立した。また谷川の鐘や越後駒の鐘に刻んだ遭難防止の山の詩は私の作で、何れも勇君の委嘱によるものだった。』

和井田氏は新潟県関川村に開設された越後支部初代支部長藤島玄氏の蔵書を公開している「藤島玄資料館」にも何回か足を運ばれているとの事、この資料館で「駒の鐘」が掲載されている越後山岳第 13 号をご覧になったものと思われる。

緑爽会入会にあたって

相良 泰子

この度、緑爽会に参加させて頂くことになりました相良泰子でございます。

自己紹介をというお話ですので、個人的なことで恐縮ですが、私の紹介をさせていただきます。

私は小島烏水の孫にあたりますが、これまでほとんど山とは縁遠い人間でした。それが次に述べるようなことから、山岳会の四国支部の会員となりました。

2012(平成 24)年 2 月に日本山岳会の四国支部(四国 4 県)が関西支部から独立して誕生し、その翌年平成 25 年から高松市峰山公園で小島烏水祭が会員の皆さまで開催されるようになりました。その第 3 回小島烏水祭(平成 27 年 4 月)に烏水の孫の一人として私がお案内を受け、初めて参加させて頂くことになりました。その際、当時の日本山岳会会長の森武昭様もご臨席されてご挨拶も交わさせて頂きましたが、尾野支部長から「日本山岳会に入会出来ますよ」というお話を頂きました。私は緑爽会の会員の皆様方と違い、それまでほとんど山歩きはしておりませんでしたので、一寸迷いましたが、この際、烏水のことをもっと知りたいという気持ちから、四国支部の会員にさせて頂くことにした次第です。

緑爽会とのご縁は近藤信行先生がご著書「小島烏水 山の風流使者伝」（大佛次郎賞受賞）を書かれた関係で奥様の緑様とご縁が出来たことに始まります。それ以来ずっと緑様とお付き合いを頂いており、緑様のご案内で「日本山岳会草創期の二人・・・小島烏水と岡野金次郎について 二人のお孫さんを交えて」に参加させて頂いたり、ご一緒に信行先生がお住まいの塩山をお訪ねさせて頂いたり致しております。このようなことから、この度、緑様から何度も伺ってありました緑爽会に是非入会させて頂きたくお願い致しました。

私は昭和 15 年生まれで、今年は 81 才になります。父は三井物産勤務でした。母（烏水の 3 女）とはお見合い結婚だったそうです。太平洋戦争が勃発しなければ、私は父の赴任予定地のヘルシンキで誕生したはずでした。しかし、急に満洲に配属させられましたので、私は満洲で生まれました。その後、家族は外地を転々としましたが、終戦後、真っ先に引き揚げ船で日本に帰れたのは終戦末期に上海のフランス租界で暮らせたからだと言われていると聞かされております。帰国後、私たち家族は目黒に住みましたが、父の兄妹の家と隣接していました。

父の弟は流行歌歌手の藤山一郎でした。両家は並んでおりましたので、毎日顔を合わせるような暮らしをしていました。そのせいか、私は母方の他の従兄弟（烏水の孫）たちとは少し違った生活環境の中で暮らした気が致します。

烏水の孫たちは誰もが物静かで、控えめで、おっとりとして構えて落ち着きある振る舞いを醸し出しているように私には映りました。でも父方はモダンな時代の先端を行く感じでした。

また、隣の叔父の家では音楽関係者などがよく集まり、賑やかにパーティーなども開いていました。華やかな世界を見て育った所為か、私は社交好きで、アウトドア人間です。それで、従弟たちの中では異端児ではないかと今でも感じております。

私はお見合いとはいえ母がよく正反対の環境に嫁いで来たものだと思ひます。烏水も何も言わなかったのでしょうか？ 祖父に一度確かめたかった疑問でした。

これからは緑爽会の数あるイベントに出来るだけ参加したいと思っております。

登山については あまり知識・経験のない新参加者ですが、宜しくお仲間に入れて頂ければ幸いです。どうぞよろしくお願い致します。

（相良さんは 2019 年 10 月 28 日の講演会「日本山岳会草創期の二人・・・小島烏水と岡野金次郎について 二人のお孫さんを交えて」に出席されています。写真が会報 165 号トップページにありますので、ご覧ください。）

古道調査の現状（情報提供）③

代表が述べている通りのコロナの影響で、古道調査に関しても難しい環境にあります。本部では古道調査のパイロット版を作成するために 6 月 27 日に本部から 3 名、群馬支部から 3 名が参加して赤城山参詣道を調査しました。この調査をもとに官公庁の後援依頼・地方自治体からの協力要請等を目的としたリーフレットの作成、ホームページのためのパイロット版の作成、書籍のデザインの作成を進めています。このうち、リーフレットはすでに制作、月内に各支部へも発送する予定です。また現在、各支部での調査状況、今後の予定の確認、各支部間の調査の調整などを目的に、各支部担当者の方々と zoom で打ち合わせを行っています。各支部では、例えば古道をいくつかの区間に分けて、誰がどこを担当するか、どう資料を収集するか、といった準備段階のところが多いようですが、すでに踏査を始めた支部もあるようです。（小林敏博）

+ + + + + ◆ + + 《ようこそ、ルームへ》 + + ◆ + + + + +

新コーナーを設けました。ここはルームで、近況やちょっと伝えたいことを気軽に投稿していただくコーナーです。写真の有無は関係ありません。今回は「こんな感じ」と幹事が書いてみました。投稿をお待ちしています。

『エッ！ 湊沢の空にUFO～！？』

夏原 寿一

いえいえ、UFOではありません。これは、局地的な上昇気流によって出来た低気圧の渦巻き雲です。

1960年7月24日の午後2時ごろ、湊沢でテントを張りながら空を見上げたら…！

低気圧の渦は、北半球では左回りですが、それは低気圧を上から見たときの話。この写真のように下から見ると右回りになっています。当たり前のことですが、なんだか新発見をした気分です。



今年も咲いたマルバルコウソウ

小林 敏博

我が家の玄関脇にあるプランターから丸葉をつけた蔓がいく本も空に向かって伸びている。マルバルコウソウという北アメリカを原産とする帰化植物だ。暑さを迎えて濃い朱色の、小さなヒルガオのような花が今年も咲いた。

二昔前、甲府市の北にある深草観音、要害山を散策し積翠寺を経て古府中町の武田神社や武田氏館跡に下りた。道の脇にはマルバルコウソウが開花を終えて長く伸びた蔓にいくつもの種子を付けていた。10粒ほどつまんでポケットにしまい、帰宅して我が家の玄関に入る前にそのプランターにぱらぱらと播いた。すっかり忘れていたが、翌年芽吹いていくつもの可愛い花を付けた。特に手入れをしているわけではないが、毎年梅雨のさ中から夏にかけて花を咲かせる。往時の情景をその都度思い出させてくれる貴重な雑草である。



俳誌「濱」と田淵行男との関係を調べる

荒井 正人

会報150号(2017年6月)に「田淵行男に繋がる細い縁」という小文を書かせていただいた。内容は、田淵行男の奥様、日出子さんと、私の父が同じ「濱」という俳句結社の同人同士であり、伊豆の鍛錬会(全国から集まる旅行句会)で会っていると思われる、というものだった。

その後、調査もろくにしないまま4年が経過したが、ひょんなことから、押し入れに保管したままだった昭和27年～33年の俳誌「濱」を見る必要に迫られた。すると、何と3回にわたって田淵行男が随想を書いているではないか。27年7月号には穂高の写真まで載っている。また同年10月号には写真集「わが山旅」の広告まで掲載されている。奥様の関係とはいえ、主宰の大野林火と田淵行男との親交が深かったことを如実に物語っている。この随想を読んでいる人は少ないに違いない。であれば、もっと調べようと、新宿の俳句文学館に行って俳誌を閲覧するなど、調査を開始したところである。しかし相当時間がかかりそうで、全く先が見えない。

～～《予告など》～～

9月イベントは10月に延期・・・首都圏などの緊急事態宣言が延長されたことに伴い延期します

実施日：10月29日（金）：山川会員の「さがみこベリーガーデン見学会とBBQ」

定員15名（先着順） 会費：3500円

集 合：JR 橋本駅改札口9時（京王相模線利用でも行けます）

その後一緒に行動。バスで三ヶ木に行き、現地まで徒歩約1時間です。

持ち物：通常の軽登山の服装。BBQ はしますが軽めの昼食（お握りなど）と飲み物は持参ください。

担 当：富澤、山川、荒井

申 込：準備の都合もあり、10月19日（火）までに、下記へお申し込みください。

また変更となりましたので、9月に申し込み済の方も再度お申し込み願います。

富澤

荒井

10月山行：日野春アルプ美術館で中村好至恵さんの個展を鑑賞し、ロッジ山旅に泊まります。

翌日は長沢さんにハイキングをガイドしていただきます。

実施日：10月11日（月）～12日（火）

行 程：10月11日 13時、中央線「日野春駅」集合。車で日野春アルプ美術館へ。

中村好至恵さんの個展鑑賞。夕方、ロッジへ。

10月12日（火）長沢さんお薦めの山へ。下山後「小淵沢駅」にて解散。

会 費：ロッジ山旅宿泊費（約1万円）＋日野春駅までの交通費＋帰りの交通費

担 当：中村、荒井

申 込：荒井までお申し込みください。

※宿泊可能人数に制限がありますので、お早めにお申し込ください。万が一満員の時は、誠に申し訳ありませんが、ご容赦願います。

※「日野春駅」到着12：56の下り電車があります。（甲府まで特急利用も可）

上りでは12：20着があり、次は1時間後になります。ご相談ください。



11月講演会：「深田久弥の思い出を語る」 詳細は次号でお知らせします

開催日：11月下旬を予定 開催場所は公共施設 時間は午後とする方向で考えています

今年は深田久弥の没後50年にあたり、生前の深田久弥と親交のあった横山厚夫氏、越後駒ヶ岳などを案内した桜井昭吉氏に久弥の思い出や人となりを語っていただきます。

なお、会報「山」での告知は10月号となります。（10月下旬発行）

※以前、近藤緑さんの司会で大森久雄、藤本慶光、深田森太郎の各氏による鼎談を行いました。

（会報113号参照）今回はまたちょっと違った雰囲気になるかと思います。

--- 編集後記 ---

とうとう会報発行にまで、コロナの影響が及んで来ました。何とか発行できて良かったと思っています。家の近くの郵便局でも陽性者が出て、一時期閉鎖となり不便でした。山歩きも控えて、大人しくしようと思います。（荒井正人）新コーナー《ようこそ、ルームへ》は、長く続くコロナ禍でも会報内のルームにおいていただいて、皆さんが交流するコーナーです。お気軽にご投稿いただきご参加をお願いします（小林敏博）

次号予告＜10月25日発行の主な内容＞新しいコーナーも含めて、皆様からの投稿をお待ちしています。

10月山行報告、編集者余話〈その4〉ほか